

令和2年7月28日
農推第1189-4号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

蒸し暑い日が続く時期です。作業時に熱中症にならないよう十分ご注意ください。

特に発生に注意

水稲

いもち病

・低温多湿で日照不足の時に発生しやすいので注意しましょう。

バラ科果樹（もも、すもも、うめ等）

クビアカツヤカミキリ

- ・6月～8月に成虫が発生します。発生ピークは過ぎているようですが、ほ場を見回って、見つけ次第捕殺しましょう。また、本種が発生している園では、成虫に対して**モスピラン顆粒水溶剤**などを散布しましょう。
- ・幼虫は、幹や枝から中華麺～うどん状のフラス（木くず等の混合物）を出します。フラスを見つけたら、千枚通しや針金等を穴に入れ、中のフラスをかき出してから**ロビンフッド**、**ベニカカミキリムシエアゾール**を注入するか、幼虫を突き刺して殺虫しましょう。
- ・フラスが見られた樹は、ネットを巻き付けるなど成虫の拡散を防ぐ対策をとりましょう。ネットは高さ2m程度まで2重にしっかりと巻きましょう。

果樹類全般

果樹カメムシ類

- ・今年度は全国的に発生が多く、府内でも一部地域では平年より発生が多くなっています。
- ・園内で発生を認めたら、**アディオン乳剤（かんきつ、もも、かきなど）**、**スタークル（アルバリン）顆粒水溶剤（かんきつ、もも、かきなど）**などを散布しましょう。

なす

アザミウマ類

- ・薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行いましょう。
- ・ハウス栽培では、開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止しましょう。

野菜類

シロイチモジヨトウ

- ・ねぎでの発生が多いですが、マメ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類など多くの作物を加害します。
- ・老齢幼虫になると薬剤の感受性は大幅に低下するので、中齢幼虫までに薬剤で防除することが重要です。



いもち病の葉病斑



クビアカツヤカミキリのフラス



ミナミキイロアザミウマ成虫※

次回の情報は8月末にお知らせします。

◎「病害虫防除グループホームページ」 <http://www.jppn.ne.jp/osaka/>

◎「防除指針」 <http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>

※農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

水稻

いもち病



葉いもち

特徴

- ◆低温多湿で日照不足の時に発生しやすく、降雨、窒素過多、過繁茂などの場合に発病が助長される。

防除のポイント

- ◆補植用の苗が発生源になることが多いので、早めに処分する。
- ◆いもち病の常発ほ場では、発生前にオリゼメート粒剤、フジワ
ン粒剤、コラトップ粒剤5などを散布する。
- ◆発生を認めたらブラシンフロアブルなどを散布する。

縞葉枯病（ヒメトビウンカ）



縞葉枯病発病株



ヒメトビウンカ成虫※

特徴

- ◆縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介されるウイルス病。
- ◆生育初期に発病すると、新葉が垂れ下がり、7月下旬～8月上旬に枯死する（ゆうれい症状）。

防除のポイント

- ◆ヒメトビウンカが飛来しないように、ほ場周辺のイネ科雑草を除草する。

トビイロウンカ



トビイロウンカによる坪枯れ症状

特徴

- ◆毎年6月頃に中国大陸から飛来し、その後第2世代、第3世代が繁殖し、出穂期以降に多発すると坪枯れ症状が生じる。

防除のポイント

- ◆早期防除が重要であるため、早期発見に努める。
- ◆発生が見られたら、スタークル(アルバリン)顆粒水溶剤、トレボン乳剤などを散布する。

スクミリングガイ（ジャンボタニシ）

生態や防除方法については、ホームページに掲載しているカラー技術資料「ジャンボタニシ(スクミリングガイ)から稲を守りましょう!」をご参照ください。

<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/color/tanishi/tanishi2017.pdf>

果樹

ぶどう

べと病

べと病の特徴および防除方法については、下記リンク先の
7月14日発表「露地ぶどう べと病に注意！」をご参照ください。
<http://www.jppn.ne.jp/osaka/R2nd/boujyojyouhou/R0207beto.pdf>

晩腐病



被害果※

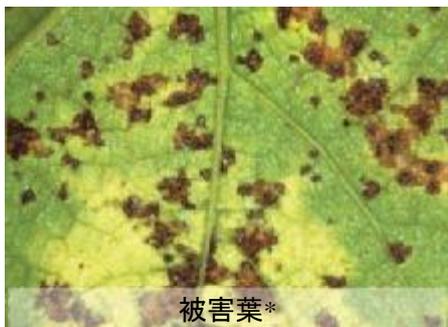
特徴

- ◆糖度が高くなった収穫間際の果実に発生しやすい。
- ◆デラウエアに発生が多く、病原菌は結果母枝、巻きひげなどで越冬する。

防除のポイント

- ◆排水や通風を良好にする。
- ◆笠かけや袋かけを行う。
- ◆前年度の発生状況をふまえ、フルーツセイバー、オンリーワンフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤などを予防的に散布する。

褐斑病



被害葉*

特徴

- ◆米国系品種に弱い品種が多く、デラウエア、キャンベルアーリーに発生が多い。
- ◆多発すると、葉が早期落葉し、果実の着色が不良となる。

防除のポイント

- ◆被害葉は園外に持ち出し処分する。
- ◆発生を認めたら、フルーツセイバー、オンリーワンフロアブル、ホライズンドライフロアブルなどを散布する。

果樹

もも

せん孔細菌病

せん孔細菌病の特徴および防除方法については、下記リンク先の
3月25日発表の防除情報「せん孔細菌病(もも)の発生に注意」をご確認ください。
<http://www.jppn.ne.jp/osaka/H31nd/boujyoyouhou/R0203%20momo%20senkou.pdf>

シンクイムシ類



被害果

特徴

- ◆ももの果実に食入するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。

防除のポイント

- ◆被害果実や被害枝は除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

温州みかん

黒点病



被害果

特徴

- ◆降雨が多くなると発生が増加する。

防除のポイント

- ◆ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤などを予防的に散布する。
- ◆ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤を使用する場合は、皮膚のかぶれに注意する。
- ※かんきつ（みかんを除く）では3剤とも使用時期が「収穫90日前まで」なので使用時に注意する。

ミカンハダニ



被害葉*

特徴

- ◆梅雨明け後に発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆発生を認めたら、ダニエモンフロアブル、コロマイト水和剤などを散布する。
- ◆薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

いちじく

アザミウマ類



特徴

- ◆果実内に侵入し食害する。食害された果実は内部が変色する。

防除のポイント

- ◆スピノエース顆粒水和剤、モスピラン顆粒水溶剤などを散布する。
- ◆ほ場の周囲を0.8mm目合いの赤色ネットで覆い、成虫の侵入を抑える。
- ◆乱反射型光拡散シートをマルチとして設置し、成虫の侵入を抑える。

バラ科果樹(もも、うめ、すもも等)

クビアカツヤカミキリ

クビアカツヤカミキリの特徴および防除方法については、下記リンク先の5月13日発表の防除情報「クビアカツヤカミキリに注意！」をご確認ください。

<http://www.jppn.ne.jp/osaka/R2nd/boujyoujyouhou/R0205kubiaka.pdf>

果樹類全般

果樹カメムシ類

果樹カメムシ類の特徴および防除方法については、下記リンク先の6月3日発表の防除情報「果樹カメムシ類に注意！」をご確認ください。

<http://www.jppn.ne.jp/osaka/R2nd/boujyoujyouhou/R0206kame mushi.pdf>

なす

すすかび病



特徴

- ◆高温多湿になる施設栽培で発生が多い。

防除のポイント

- ◆高温多湿になる施設栽培で発生が多いため、適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ダコニール1000、ベルコート水和剤を予防的に散布する。
- ◆発生を認めたら、スコア顆粒水和剤、アフエットフロアブルなどを散布する。

うどんこ病



特徴

- ◆窒素過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生する。

防除のポイント

- ◆発生を認めたら、パンチョTF顆粒水和剤、プロパティフロアブル、スコア顆粒水和剤などを散布する。

灰色かび病

灰色かび病の特徴および防除方法については、下記リンク先の5月26日発表の防除情報「なす灰色かび病に注意！」をご確認ください。

<http://www.jppn.ne.jp/osaka/R2nd/boujyoyouhou/R0205haikabi.pdf>

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除のポイント

- ◆ハウス栽培では、開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆露地栽培では、天敵昆虫の温存のため、ソルゴー囲い込み栽培などを行う。
- ◆発生を認めたら、アフーム乳剤、ディアナSC、プレオフロアブル、モベントフロアブルなどを散布する。

野菜類・花き類全般

シロイチモジヨトウ

6月26日発表の防除情報「シロイチモジヨトウに注意！」をご確認ください。

<http://www.jppn.ne.jp/osaka/R2nd/boujyoyouhou/R0206shiroichi%20.pdf>

ハスモンヨトウ



若齢幼虫

特徴

◆ 8月以降多く発生する。さといも、なす科野菜、あぶらな科野菜など多くの作物を加害する。

防除のポイント

◆ 発生を認めたら、アディオソニル乳剤（さといも、ずいき、オクラ、豆類（未成熟）など）、ディアナSC（かぼちゃ、なす、トマト、ミニトマトなど）、コテツフロアブル（さといも、ずいき、オクラ、花き類など）、プレバソソフロアブル5（さといも、なす、ピーマン、キャベツなど）などを散布する。

ヨトウムシ類については
「ヨトウムシ類の見分け方」をご参照ください。

http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/yoto/yoto_l.pdf

コナガ



成虫 ※



幼虫 ※

特徴

- ◆ 主にあぶらな科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆ 同じ系統の薬剤を連用しないよう注意する。
- ◆ 発生を認めたら、アクセルフロアブル（非結球あぶらな科葉菜類など）、ディアナSC（非結球あぶらな科葉菜類など）などを散布する。

アブラムシ類



ワタアブラムシ ※

特徴

- ◆作物を吸汁し、樹勢を低下させる。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。
- ◆薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除のポイント

- ◆発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤（なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこし、しゅんぎくなど）、アドマイヤー顆粒水和剤（なす、トマト、ミニトマト、豆類（未成熟）など）、コルト顆粒水和剤（なす、トマト、ミニトマト、花き類など）、ウララDF（なす、トマト、ミニトマト、ピーマンなど）を散布する。

オオタバコガ



幼虫

特徴

- ◆果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫糞が確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、捕殺等も含めて早めに対応を行う。
- ◆発生を認めたら、プレオフロアブル（なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこし、花き類など）、アニキ乳剤（なす、トマト、ミニトマト、ピーマン、未成熟とうもろこし、きくなど）などを散布する。

きく

白さび病



特徴

- ◆施設では春先と初冬に、露地では初夏～梅雨時と秋期に発病が多い。

防除のポイント

- ◆ハウスでは換気を良好にし、湿度を下げる。
- ◆被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ◆薬剤散布は葉の裏を中心に行うと効果的である。
- ◆**ストロビーフロアブル**等を散布し、予防に努める
- ◆発生を認めたら、**トリフミン乳剤**を散布する。

注) ストロビーフロアブルは高温多湿下では、薬害の恐れがあるので使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

黒斑病、褐斑病



黒斑病*

特徴

- ◆雨滴によって感染が拡大するので、降雨前にしっかり防除する。

防除のポイント

- ◆被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ◆**ダコニール1000**、**ストロビーフロアブル**などを散布して予防する。

注) ストロビーフロアブルは高温多湿下では薬害の恐れがあるので使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆品種により被害の現れ方に差がある。
- ◆花弁にはミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマ等が発生し、葉には主にクロゲハナアザミウマ等が発生する。
- ◆ミカンキイロアザミウマはウイルス病 (TSWV、CSNV) を媒介する。

防除のポイント

- ◆発生源となる周辺の除草を行う。
- ◆発生を認めたら、**ディアナSC**、**アフーム乳剤**、**グレーシア乳剤**などを散布する。
- ◆花弁への被害を防ぐため、膜割れ (蕾から着色した花弁が見える前) 前後の防除を徹底する。